

5. 腎癌分子標的療法治療中の口腔粘膜炎に対する 半夏瀉心湯含嗽の有用性の検討

香川大学医学部 泌尿器科

○林田 有史、呉 秀賢、土肥 洋一郎、末永 武寛
松岡 裕貴、矢野 敏史、加藤 琢磨、平間 裕美
上田 修史、杉元 幹史、寛 善行

【緒言】近年腎癌の診療は大きく様変わりし、進行腎細胞癌に対して分子標的薬が標準的に用いられるようになってきた。口腔粘膜炎は、分子標的療法中に高い頻度で発生する合併症の一つであり、発生するとその不快感により患者の飲食・会話に支障をきたし、分子標的療法の減量・中止の原因となることがしばしば経験されている。

【目的】口腔粘膜炎の発症予防に半夏瀉心湯の含嗽が有用であるかどうかを検討する。

【対象】

- ①腎癌に対して分子標的療法を開始する患者7名
- ②腎癌に対して分子標的療法を施行中で、前コースに口腔粘膜炎を発症した患者2名

【方法】半夏瀉心湯(TJ-14)2.5gを微温湯に溶解し、1日3回食前30分前に含嗽をおこない、その後吐き出してもらった。下痢がある場合は、うがい後の内服を可とした。

【評価方法】CTCAE v4.0を用いて行った。

【結果】半夏瀉心湯を投与した9例中7例で分子標的療法中に口腔粘膜炎の発症を認めなかった。前コースに口腔粘膜炎を発症した2例では次コースの分子標的薬の投与量は減量されていた。口腔粘膜炎はG1が1例、G3が1例に発症したが、分子標的薬の休薬、減量にてすみやかに改善を認めた。9例とも半夏瀉心湯によるものと考えられる副作用は認めなかった。

【考察】少数例の検討ではあるが、分子標的療法中の口腔粘膜炎予防に半夏瀉心湯が有用である可能性が示唆された。